

極楽寺だより



2014(平成26)年11月号

発行所：極楽寺 (浄土真宗本願寺派) ☎759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

秋の永代経法要のご案内

次の通りお勤めいたしますので、お誘いあわせの上、お参り下さいますようお願いいたします。

十一月十七日(月)

昼一時半 夜七時半

十一月十八日(火)

昼一時半

講師 俵山 正福寺住職

上原泰教師

昼間お仕事の方は、ぜひ夜席にお参り下さい。

えいたいきょうほうよう
永代経法要とは

住職が子ども頃は、



山を走り回って遊んでいました。しかし、今は大人でもなかなか入ることができません。なぜなら、山に入る人がいなくなったことで、道がなくなってしまうからです。先に行く人が踏みしめる歩みによって、道はできるので。私たちのところはまだ、お念仏の教えが伝わってきたのも、先だつてこの道を歩まれたご先祖があるから、志を納めお寺を護つてこられた先輩方がいるからなのです。そして次に歩む者がなければ、道は途絶えてしまいます。永代経法要とは、永代にわたって伝えられたこのみ教えを感謝と共にいただき、永代にわたり伝えていこうと

ご予約下さい

◇12月18日14時 仏婦報恩講

◇12月31日夜23時45分 除夜の鐘撞き

◇1月1日10時 元旦会

◇1月14~16日 御正忌報恩講

00字 N天
 12字 大相撲秋場所
 「4日目」
 ▽新三役紹介・常幸龍
 正面解説・谷川
 芝田山
 向正面解説・大山
 ~国技館 (中断字 N
 4.00~03. 5.00~03)
 00字 N◇10情報維新!山口
 ▽秋の中継シリーズ①
 極楽寺・花燃ゆゆかり
 の品~長門【福岡別】
 00日 ニュース7
 あすに迫った住民投票
 スコットランド独立は
 30字 クローズアップ現代
 行政データ開放の衝撃

極楽寺から生中継!

9月17日午後6時10分より、NHK山口放送の『情報維新!やまぐち』で、極楽寺からの生中継がありました。来年の大河ドラマ『花燃ゆ』にちなんだ特集の第一回目が、なんと極楽寺。前住職に活躍してもらおうと、住職はゆったりした気持ちでいたのですが、結局出演する羽目に。テレビ出演は本当に緊張しましたが、

何より生中継というのが緊張を煽ります。何度もリハーサルをするのですが、時間オーバーにならないか、言うべきことが飛ばないか、ドキドキの中での撮影でした。でも、自分の姿って見れ



ませんね。恥ずかしくて。こんな恥ずかしい姿をさらしながら、図々しく生活をしているのですね。善導大師が「仏法は鏡のようなものである」といわれていますが、まさに自分の生き方を見つめさせていただく鏡がなくては、みっともない生き方を垂れ流していても気づかないことを、改めて教えられました。

さて、今回は『花燃ゆ』関連だけではなく、極楽寺を中心に活動している「ホワンイシィ・コーラス」の特集もありました。NHK山口放送の石川ディレクターが、極楽寺のホームページを見て下さって、そこからコーラスの活動紹介、そして出演につながったのでした。



オープニングからエンディングまで出してもらったことで、温かで楽しい雰囲気、番組がいっぱいになりました。

しかし、生放送って大変ですね。何日も前から手配して、準備して。当日も、17名のスタッフが5時間も前から入って、リハーサルを繰り返して。リポーターの丹さんも、気配りをされながら、うまくこちらの言葉を引き出されるなど、さすがプロフェッショナルだと感心しました。おまけに、ゴミのチェックを含めた後かたづけをして、帰ってからは反省会があるそうです。これからは、軽い気持ちで番組を見るのはやめようと、深く思ったことでした。

皆さん、本当に有難うございました。■



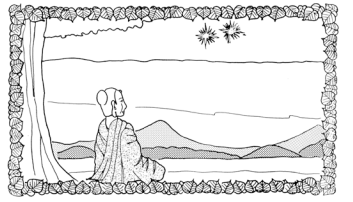
情報維新! やまぐち 総合テレビ 月~金曜日 午後6時10分~7時00分

ニュースがよくわかる!
 山口のニュースを、「早く」「深く」「わかりやすく」

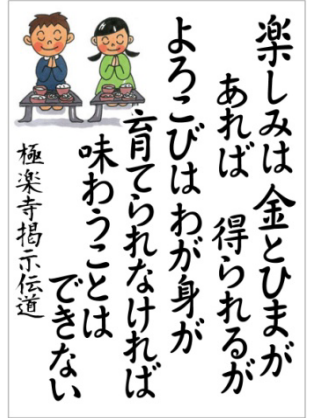
もっと地域密着で!
 キャスター・リポーターがスタジオを飛び出し あなたの街へ!

やまぐちを応援!
 地域の魅力を伝え、ガンバ!人々を全力で応援します

長瀬 菜穂 浅野 達朗 長安 智子



極楽寺揭示伝道 けいじでんどう



11月の言葉

近頃は、お金と時間さえあれば、いろんな楽しみを得ることができ、時代になりました。ところが悲しいことに人間は、どんな楽しみでもそれに慣れると「当たり前」と感じ、退屈してしまうのです。

「もっと楽しく」「もっと面白いものを」「もっと刺激的なものを」と求めていく先に、限りはありません。それどころか、どれだけのことをしてもらっても、それを「当たり前」と感じている間は、喜びも感動も生まれるはずはありませんし、満たされることなど決してありません。

ある週刊誌に、こんな話がありました。近頃は、お店の失敗について過剰に文句をいう「モンスター消費者」が増えているようです。「お客様は神様」といった誤解された考え方の下、消費者意識の高まりと、自らの言い分を発信できるITメディアを持つ時代となったことで、「過剰クレーム」がつけやすくなっているのだとか。

この「モンスター消費者」が集まりやすい店というものがあるといいます。それは価格競争が進む中で、値段を安くし、社員を酷使し

わり引き割引クーポンをつけるなど、身を削ってサービスをやる店ほど、集まるのだとか。なぜなら、店側が精一杯行った低価格と高いサービスを当たり前と考えると、そこからなお過剰なサービスを求めるからださうなのです。本当に、切ない話です。人間の「当たり前」は、どんどんエスカレートし、過剰なサービスを求めていく。それが巡り巡って自分の職場にも求められていく。息が詰まるような世の中が広がるはずはです。

『正信偈』の最初に、阿弥陀如来のはたらきとして「不思議光」という言葉が出てきます。私たちは、何か特別なことが起ったり、思いもよらないことが起った時に「不思議だ」と言います。しかし、仏教で言う不思議・不思議とは、ややこしいかもしれませんが、実はすぐく当り前のことを言うのです。

今、当たり前のように生きているこのことが、どれだけのはたらきの中で、どれだけの歴史の中で、様々ないのちの連なりの中で成り立っているのか。今、どれだけの恵みと支え

で生かされているのか。「当たり前」だと思っていたことが、どんなに不思議なことだったのかと驚きを感じる身に育てて下さるのが仏法であり、そのはたらきを「不思議光」とあらわされているのです。



どんなに不思議なことが起こっても、それを「当り前」だと思ふ者には、よろこびも感動も、満足まんぞくもありません。しかし、自分が仏法に育てられていく中で、当り前だと思っていたことが、実は「不思議」なことであり、「有り難い」ことであつたのだと気づかされる。そんな身に育てられて初めて、よろこびや感動を味わうことができるのだと教えられます。そこにこそ、自分の人生を満ち足りたものとして、いただくことができますのではないのでしょうか。■



10月の言葉

二人のおばあちゃんが、金沢かなざわのお寺に伝わる幽霊ゆうれいの絵を見にいかれました。二人は同じ絵を見て、全く違う、それも対照たいしょう的な言葉を言われたそうです。

一人のお婆ちゃんおばあちゃんは、恨みうらみつらみのすぎまじい眼めをした幽霊の絵を見ながら「うちの嫁の眼だ」とつぶやいたのです。自分はさて置いて。

もう一人のおばあちゃんおばあちゃんはというと、「私は、あんな眼で嫁を見て

いたかなあ」と、自分の姿を振り返りながら、つぶやかれました。自分を振り返ることのない生き方は、自分がどんな眼をしながら生きているのかもわからないということなのでしょう。恨みつらみのすぎまじい幽霊のような眼をしていても。

私たちは、毎朝鏡を見ます。寝癖ねぐせはないか、シワやシミを隠せているか、みっともない姿をしていないかと、身支度みじたくを整ととのえます。しかし、自分の醜みにくく、みっともない生き方を隠かくせているかについては、なかなか気にはなりません。人の悪い部分はいくらでもわかるのですが、自分の悪い部分ぶぶんというのは、なかなか気づくことさえできません。でも、醜い生き方を平気でさらす方が、余程よほど恥ちずかしいですよ。もっとも、自覚じかくしていききたいものです。

大会場で開かれる仏教講演会がありました。五、六百人の方々が集まられる大規模だいきぼなものです。中には、お付き合いで来られる方もあつたようでした。閉会式も終わり、主催者しゆさいしやの方が、受付を担当していた人たちをねぎらおうと声をかけると、そのうちの一人が「最後のお話が始まつてすぐのことです。中年の男性が一人、途中とちゆう帰られるようだったので挨拶をする、立ち止まって『俺に当てつけみたいな話をしやがって。気分が悪くなった。』と言われて立ち去られました。」と教えてくれたというのです。

立ち去られた方は、まさしくご法話の言葉に自分の生き方をずば

り言い当てられたのでしょうか。思わずその場を立ち去ってしまったようですが、その言葉はトゲのように心に刺さり、気になり、邪魔になったのではないのでしょうか。それまで何とも思わなかったことに、痛みを感じるようになったのではないのでしょうか。それは「私は、あんな眼で嫁を見ていたかなあ」と幽霊の絵に自分の姿を見出された、おばあちゃんにも共通している姿勢です。

ならば、この方たちの聞き方こそ、本当の仏法の聞き方なのでしょう。いくら聞いても「うちの嫁の眼だ」と他人事ひとごとにしている限り、虚しいものに終わってしまいます。

善導大師は、「経教は鏡の如し」と言われていました。み教えとは、自分を映す鏡であり、生き方を映す鏡であると。ならば、朝起きて鏡を見ながら身支度を整えるように、毎日仏さまに手を合わせ、生き方を振り返り、整える時間も大切にしなければならぬのではないのでしょうか。そんなことを思いながら、改めて、私は自分の生き方を振り返っているのだろうかと考えさせられたことでした。 ■



9月の言葉

ギリシャ神話に、こんなお話があります。スフィンクスが通りかかる人間になぞなぞを出し、答えられなかった者を食べてしまうというのです。そのなぞなぞとは「朝は四本足、昼は二本足、夕は三本足。この生き物はき物は何か？」というものでした。ちなみに答えは・・・、「人間」です。赤ん坊の頃は四つん這い、やがて一本足で立つようになるが、老人になると杖をつくので三本足になるとというのがその理由。「朝」「昼」「夜」は人間の一生を一日に例えた表現ですが、この物語が伝えようとしているのは、人間とは時間の経過と共に姿が変わるといのが大前提の生き物であるということなのでしょう。

人間は、生まれ、成長し、老い、病み、死んでいく。時間が経つことに姿が変わる。つまり、幼児とは「過去の私」のことであり、老人とは「未来の私」のことであり、病人や障害を持つ人は「たまたまある分岐点で『あっち』に行った私」なのです。この厳粛な事実を、私たちはいつい忘れてはいないのでしょうか。

これは、ある女子大生の文章です。初めて読んだ時、呆然としたことを覚えています。 →

高齢者が孤独死しなければならぬのはなぜでしょう。

障害をもった人たちが、あまり街へでてゆけないのはなぜでしょう。

友だちとそんなことを話すたびにいつも言われるのは、「年寄りというのは、あるいは障害者というのは、助けてもらうことが当たり前だと思っ
ていて、感謝がたりない、傲慢だ、そんな人たちに手助けをしてやる必要
はない」ということです。

「では、あなたがたとえば事故にあって、ひとの手助けがなければ生きら
れない体になったらどうするのか」と聞けば、「その時は自殺する。世の
中に迷惑をかけたくないから」と言います。私は、そんなのっておかしい
んじゃないか、と思いつながら、その話にうまく反論できず、どこか共感す
らして、黙り込んでしまいます。

これがどういう意味だか分かりますか。私たちは、自分が困った状況に
立たされたときに、自分の力だけではだめで、他人の助けが必要な時に、
誰かが手をさしのべてくれるかもしれないことを信じていないんです。そ
んなことはありえないと思っっているんです。だから、困っている人を見て
も、黙って通り過ぎることが当たり前になっている。人間は、なにか代償
を払わなければ、かわりあうことができないと、思い込んでいるんです。

（「教育を取り戻すために」——八尋麻子）

人間は、いつも強く生きられるわけではありません。病気にもな



りますし、必ず年をとります。もしかしたら、障害を持つ身になるかもし
れません。それらは全て「未来の私」の姿です。そうになったら「自殺する。
世の中に迷惑かけたくないから。」ということであれば、いつもビクビク
しながら生きていくしかありません。何より子どもの頃から、既にいろん
な人に迷惑をかけ、赦してもらって育てられてきたのではありませんか。
仏教では、正しい見方（正見）とは、偏らない見方であるといわれま
す。今、見えている事だけですべてを量り、決めつけることは、明らかに
偏っています。目には見えないけれども、そこにある事実を想像していく。
そこから知られることがたくさんあるはずですよ。

作家マルセル・ブルーストに、

「老年に対しても死に向かっても、同じく
無頓着に立ち向かう人があるが、それは他
の人たちより勇気があるからではなく空想
力が少ないからである」
という言葉があります。



「過去の私」「未来の私」「そうなるかもしれない私」と想像してみた
きに、もの見方は変わるはずですよ。当然、向き合い方、接し方も変わっ
てくるでしょう。そこに、謙虚で敬いのある生き方が始まるのだと教えら
れるのです。■

お取越しの季節です

お寺にご連絡下さい。
日程を調整した上で、
お参りにうかがいます。



「お取越し」とは、真宗寺院において最も大切な行事である親鸞聖人のご法事「報恩講」を、ご命日よりも取越して（早めて）、各家々で勤めるという門徒にとって大切な伝統行事です。ところが近頃は、「どうして親戚でもない人の法事を、勤めなくてはならないのか！」と怒られそうな時代になりました。しかし、親鸞聖人が亡くなられてから約七百五十年。長い歴史を通して、「伝えなくてはならない願いがある」「受け止めなくてはならない尊いご恩がある」と私たちのご先祖や先輩方が、その心を「お取越し」という行事に込められて、私たちのところにまで届けて下さっているのです。

いよいよ来年一月から、萩を舞台にしたNHK大河ドラマ『花燃ゆ』が始まりますが、今年の『軍師官兵衛』もいよいよ佳境を迎えるところです。主演の岡田准一くんは、本当にいい役者になりました。

さて、『官兵衛』の中で、織田信長と本願寺が争っている場面がありました。その際、NHKに「本願寺のご本尊が、間違っている。阿弥陀様の御像ではない。」

という指摘があったそうです。確認してみると、間違えてお釈迦様の像がおかれていました。

近頃は、若い人に仏像マニアが増えているそうですが、釈迦如来像と本願寺の阿弥陀如来像の違いは、マニアや専門家でなくてもわかるほどはつきりしています。お釈迦様は座っておられるのですが、本願寺の阿弥陀様は立ち姿なのです。浄土真宗のお寺では、座ったお姿のご本尊はありません。



ところが実は、仏様は座っておられるのが本来の姿なのです。浄土真宗のお寺以外で、立ち姿の仏像はないのです。（菩薩像や天人像は立ち姿もありますが、あくまでも菩薩や天人であり、仏様とは違います。）

善導大師という方は、この阿弥陀様の立ち姿を「軽挙」であるとして、仏様にあるまじき軽々しいお姿だと言われています。では、なぜ浄土真宗では、立ち姿の阿弥陀如来像をご本尊とするのでしょうか。

オシエノカケラ「毎日お参りしましょうキャンペーン」は、紙面の関係上、お休みさせていただきます。





お取り越し報恩講は用意されたのです。私にかけられている願い
や心に気づくとき、生き方は必ず変わってきます。■

も先に、心配して下さい、願いをかけて下さる、はたらいて下さっている仏様です。私が手を合わせる時も合わせないときも、忘れているときさえも、はたらき続けて下さっている仏様なのです。

親鸞聖人は、その深い心に目覚め、その願いを私たちに教えて下さった方でした。そして、

それは、迷いを迷いとも気づかずに、迷いを深める私たちを心配し、思わず立ち上がりずにはおれない心をあらわしているからです。仏様にあるまじき軽々しい姿をせざるをえないほど私たちのことを思って下さる阿弥陀様の心を立ち姿であらわしているのです。横から見ると、前に身を乗り出しておられるのがよくわかります。

(今度、極楽寺にお参りの際に、ぜひご確認下さい。ただし、必ず住職に一言声をかけてからにして下さいね。)



極楽寺ホームページ

こつこつ更新中

極楽寺.com で、検索して下さい。

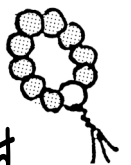


極楽寺だよりを送りませんか

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。有縁の方々へ。お寺へお申し出下さい。直接郵送します。送り先が増えると、うれしいのです。

お寺まで、お持ち下さい。

お念珠 修理いたします。



□ 今年の夏は、台湾からのホームステイ受け入れ、中学校グラウンドの整備事業、大河ドラマ『花燃ゆ』関連と、激動の日々が続きました。これから来年にかけて、長門市の『花燃ゆ』実行委員会に関わるなど、まだまだ忙しさは続きそうです。せっかくのダイエットも、リバウンドしそうで怖い……。その時は、忙しさから来るストレス太りだと、温かく見守っていただけるとしあわせます。■

